

## 熊本第6師団図の初期整備

井口悦男

帝京大学 経済・法・文学部 教職課程 〒192-0395 東京都八王子市大塚359

### はじめに

日本の正式地形図は、明治10年代末から小田原より西へ作成されはじめるが、全国に及ぶ迄には、当時の国力で時間を要した。東海道、山陽道を進み、九州に図ができるのは明治30年のことで、福岡、久留米、佐賀辺は同33年、熊本では同34年、そして鹿児島付近は明治35年となる。四国、北陸、東北などでは、さらに遅れる地域がみられた。

このように正式図が広がる時期、明治20年代から同30年代にかけて、一方で、各地駐在陸軍師団等が応急用に作成した迅速測図群が存在した。中央の作図機構が、同時には地方駐在軍の演習用図のすべてを用意できないのを、地方の軍自体がそれぞれに作成し、正式図成立までの需要に応じた。

九州では、全体を管内とする熊本駐在の第6師団司令部をはじめとする、各部局作成のものが知られる。それらは、熊本と中央とを結ぶ交通路周辺の描写を中心として、さらには、九州各地軍駐在、要塞地間を明らかにする路線周辺の地域情報としての簡易応急軍用図が加えられた。

このような、正式図成立までの応急図としての地域作成図の歴史を明らかにすることに努力してきた筆者は、各地域に見られる新たな展望を加えてきたが、九州の6師作成図域については、周辺地域図の存在を中心に述べてきた。たとえば、佐賀より西へ、長崎県域に伸びる図群、すなわち大村駐在聯隊設立に関連し、佐世保、長崎要塞地などと結ぶ路線図の存在および特色を考えてきた。図群の名称のみ知られていたもの、あるいは新たに分布が確認されたものにわたる。<sup>2)~6)</sup>

今回これ迄とは反対に、すでに6師作成の迅速測図の分布が知られている、九州中心域における発行年度毎拡大方向の変化、順次整備される状況から、注目点を明らかにできればと考える。そのうえで、各地方で正式図の成立を待たずに作成された理由も展望できればと思う。

九州の中心、筑紫平野域の久留米付近を図域とした6師図の分布は、全国の迅速測図の所在を、早くから掘り

起こすことに努められた清水靖夫氏のものが知られる。<sup>1)</sup>この努力作を基本に、各図の図化域を記入してみると、図1(次ページ)のようになる。師団司令部所在地、熊本との間の図の分布は、明治25~27年発行図段階では、筑紫平野から南方、筑肥山地越えにより3~4通りの道路沿いであることが明らかである。この事実、平野部で広い図化域を持ち、山中の谷間部で狭く、通過必要域に限定した、軍用図として、ごく自然な選択の結果にはかならない。

そのうえで、日清戦争直前期には、正式図並みの横長図郭による井然とした切図方式の図割を中心として、ごく一部に、貼りだし小補図や、変則的な縦長図域、そして重複図域が含まれる。まさに、一定経緯度にもとづく切図方式に統一表現される直前にある。このような状況は、九州の6師図のみに見られたのではなく、地域師団による歩みの変化は認められるものの、大局的には、同じ方向をたどった。縦長図を当初採用した地域のばあいも、関東平野北半を別にして、多くは、横長図に組み換えられる。

ところで、このようなほぼ井然とした明治25~27年版の各図郭分布に対し、それ以前発行のものがあるとするれば、どのような図郭によっていたのであろうか。清水氏も分布の多い明治25~27年版図に比べ、少ないそれ以前作成図に気付かれておられるが、断片的に取りあげられるに止まる。<sup>1)</sup>筆者も、それらの全体像に達したとは言えないが、押しひろげられる部分を述べておくとすれば、図2、図3のような分布のものがあげられる。(図2は40ページ、図3は41ページ参照)

図2に示した各図は、北側からあげれば、A図群2面「久留米驛」「福嶋町」が明治18年12月測(ただし現図は、明治22年8月再版分による)の、第1号、第2号にあたる。隣接図名を記入しないが、図3にあげた同じ地域図の状況から、2面組みであったと考えられる。つぎのB図群はたぶん3面構成で、A図群第2号「福嶋町」図の西南隅近くの羽犬塚から先の、有明海寄りの街道沿いを図化したもので「羽犬塚」「瀬高」「渡瀬」と続くが、やはり欄外注記は、第1号から第3号とあるに止まる。そして「歩兵

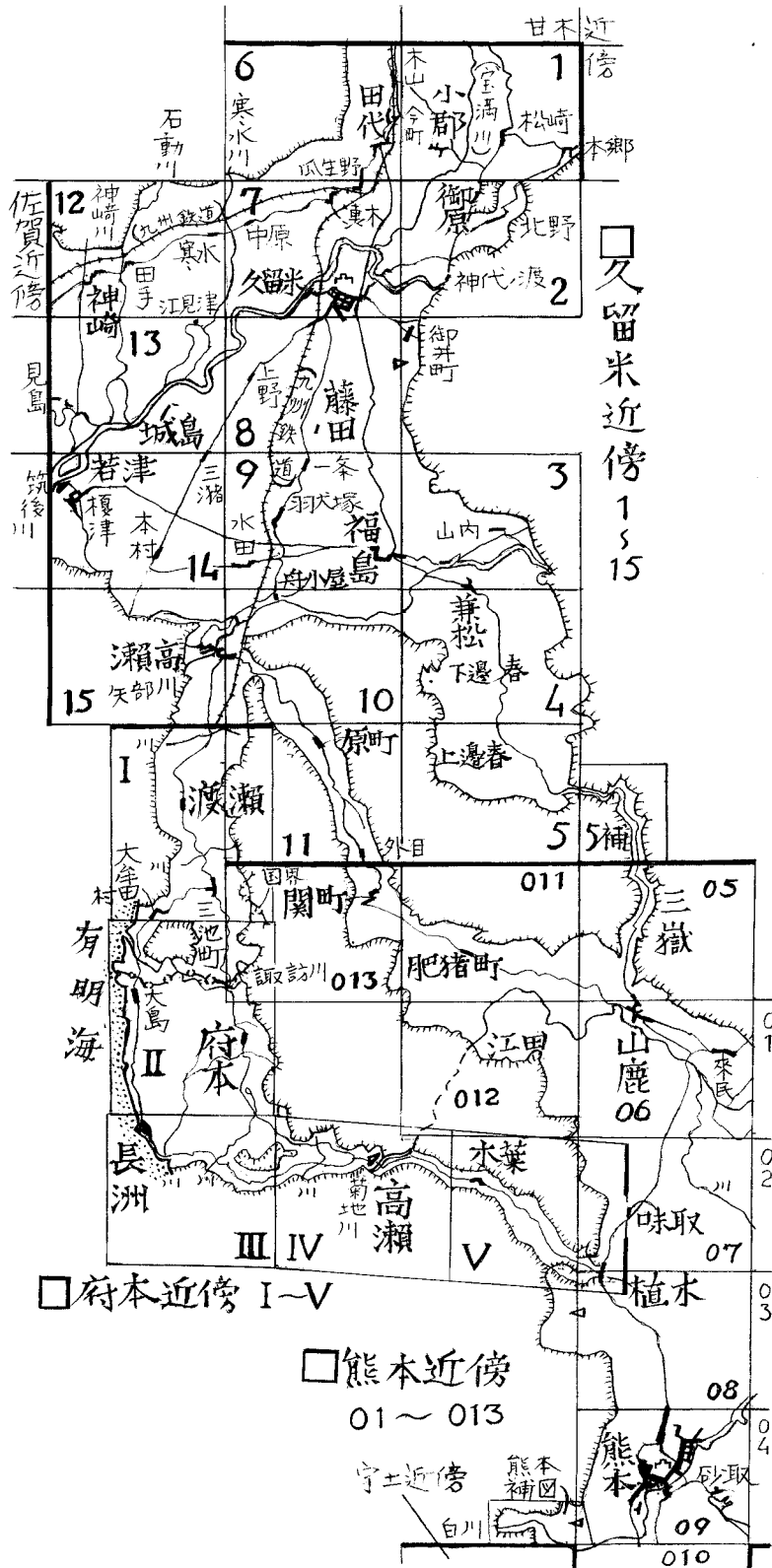


図1 明治25・26・27年版 久留米・熊本間第6師団図分布

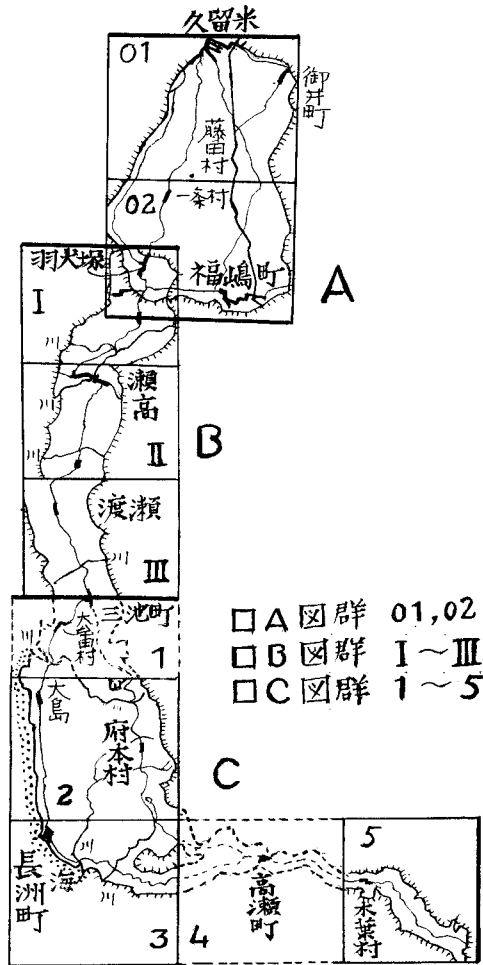
注：以下各図内、ケバ線外側の白地部分は、未測地を示す  
また、図内明朝体地名は、その位置と図名をあらわす

表1 明治25・26・27年版 久留米・熊本間第6師団図諸要目

近傍名	号数	図名	大きさ (現状最大値)	備考
久留米 M25. 6. 30刷	第壹號	小郡村	ヨコ×タテ(mm) 451×351	図東半計曲線入り5m毎 西半首曲線のみ10m毎
	第貳號	御原村	451×356	平野中につき等高線描入なし
	第三號	兼松	450×352	首曲線のみ／丘上標高点2ヶ所／標高注記1ヶ所／10m毎
	第四號	下邊春	452×353	首曲線のみ／丘上標高点10余ヶ所
	第五號	上邊春	451×352	首曲線のみ／丘上標高点8ヶ所
	第五補	—	224×256	首曲線のみ 図名「栗瀬」と朱書(旧所蔵者による)
	第六號	田代	451×352	図東南隅平野中の小川を境に西側計曲線入り5m毎 途中で線消滅
	第七號	久留米	451×353	図北西山地部に計曲線入り5m毎
	第八號	藤田村	450×352	首曲線のみ／10m毎
	第九號	福島	449×353	首曲線のみ／10m毎／標高及標高点注記あり
	第拾號	舟小屋	450×356	首曲線のみ 平野中にその痕跡あり
	第拾壹號	原町	452×354	路上測図／首曲線のみ／標高注記なし
	第十二號	神崎	452×351	計曲線入り5m毎
	第拾參號	城嶋	452×352	等高線なし／図描精度低し
	第拾四號	若津	449×356	上に同じ
第拾五號	瀬高	450×353	上に同じ	
熊本* M26. 1刷	第五號	三嶽	450×349	首曲線のみ／菊池川西側丘陵地標高点小数点以下2位迄表現／5m毎カ
	第六號	山鹿	453×350	首曲線のみ／丘陵地標高点小数点以下2位迄／5m毎
	第七號	味取	452×356	首曲線のみ／5m毎カ
	第八號	植木	452×354	上に同じ
	第九號	熊本	448×352	上に同じ
	補図	—	274×116	上に同じ
	第拾壹號	肥猪町	451×351	首曲線のみ／東 $1/3$ 5m毎／標高点小数点以下2位迄／西 $2/3$ 10m毎
	第拾貳號	江田	451×353	首曲線のみ／東 $1/2$ 5m毎／標高点小数点以下2位迄／西 $1/2$ 10m毎／等高線1本毎途中で切れる
	第拾三號	關町	449×352	首曲線のみ／10m毎／標高注記あり
府本 M27. 7刷	第一號	渡瀬	415×498	首曲線のみ／標高注記なし／5m毎カ
	第貳號	府本	426×498	上に同じ
	第三號	長洲	432×380	上に同じ
	第四號	高瀬	451×384	上に同じ
	第五號	木葉	450×382	上に同じ

注：\*筑紫平野方面関連図に限定(1~4, 10を除く)

図2 明治18・20・22年測  
久留米・熊本間第6師団図分布



第12旅団司令部」による明治22年6月測とする、路上測図に近い簡易測量の図描のものである。さらに南に接続するC図群5面がある。ただし、図2でその図郭位置を点線であらわしたように、うち第1号とみられる「三池町」図と、第4号にあたる「高瀬町」図との2面は、筆者には欠図であり、第5号の「木葉村」図も図化域は残されるが、上部を裁断されたものに接している。図2の状況は、図1の「府本近傍」図の図描から、組み換え前の各図分を推定してみた。これら5面は明治20年9月測同22年9月製版とする。いま「府本近傍」図群名をあげたが、これは、B図群の「渡瀬」図を加えたC図群5面を合わせ、明治27年版「府本近傍」図5面に組み換えるとともに、B図群の「羽犬塚」「瀬高」2面部分を、明治25年版(図1)「久留米近傍」図群中に取り込んでいる。以上、明治18、20、22年測とするA、B、C各図群は、筆者の披見分には各帯封不在のため、それぞれの近傍名不明である。それぞれ面数5以下と少数であるが、細かく分れていたことは、その号数表示から確かめられる。以上、いまA、B、C3図群に分れるとしたが、その実質的発行年代としては、明治22年が考えられる。

その翌年に発行された図域をしめすものが図3である。そのおり「久留米近傍」とする全体の図域は拡大されているとともに、「久留米」「福嶋」の2図域については、明治22、23年と続けて発行されていることになる。「久留米」図の内容は「久留米驛」と変更なく、その図郭を東西幅で多少削っている。(図2、3の表中の図郭数値で比較)一方「福嶋」図域では、南の未測地が消え、東側でも、ほぼ消滅する。

「福嶋」図域に見られる、明治18年測域に加えられたこの変化が、何時なのか明らかにしてくれない。図3にしめされた各図は、いずれも「明治23年」6~8月「図」あるいは「製図」とする。その一方、図3にしめたように、「福嶋近傍」「南関近傍」「佐賀近傍」とそれぞれ分けられる。ただし、各近傍内部の付番順は、図1の付番順に見られる、右上から左下の方向に機械的というか統一的な方式、すなわち正式図の付番順以前にあることを表わす。ひとつには、各図群構成面数の少なさ、言い換えれば、作図域の狭さに特色のある初期事情も加え、付番順が任意とされていたことによると考える。当初地形図作成にあたり、見本とされたフランス方式の影響とみ

図3 明治23年6~8月製図  
久留米付近第6師団図分布

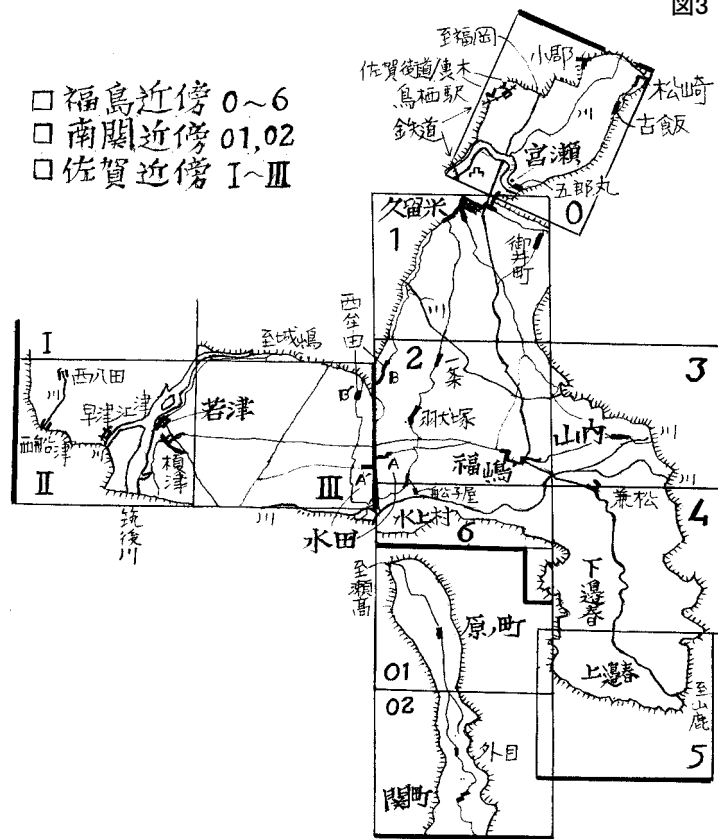


表2 明治18・20・22年測 久留米・熊本間第6師団図諸要目 (前ページ図2分)

近傍名	号数	図名	測版年	大きさ (現状各最大値)	備考
A*	第一號	久留米驛	M18. 12 測	ヨコ×タテ(mm) 506×380	首曲線のみ／標高注記あり／10m毎
	第二號	福嶋町	M22. 8 再 〃 〃	506×374	上に同じ
B*	第一號	羽犬塚	M22. 6 測	421×313	平野のみ／等高線見えず
	第二號	瀬高	歩12旅団 〃 〃	424×304	首曲線のみ／標高注記見えず
	第三號	渡瀬	〃 〃	421×311	計曲線痕跡あり／標高注記あり／5m毎
C*	(第一號) **	(三池町)	M20. 9 測カ 22. 9 版カ	(455×215)±	(? 下に同じカ)
	第貳號	府本村	M20. 9 測 22. 9 版	456×378	計曲線入り／三角点小数点以下2位迄表示／ 標高注記あり／5m毎
	第三號	長洲町	〃 〃	454×382	計曲線入り／標高注記各所／5m毎
	(第四號) **	(高瀬町)	〃カ 〃カ	(440×382)±	(?)
	(第五號) ***	木葉	〃カ 〃カ	(352×382)±	計曲線入(不完全)／標高注記各所／5m毎

注：\* 帯封欠のため近傍名不詳  
\*\* 欠図ため再版(明治27年版)から図郭値推定  
\*\*\* 周囲裁断のため図郭値再版から推定

表3 明治23年6～8月製図 久留米付近第6師団図諸要目（前ページ図3分）

近傍名	号数	図名	製図年月	大きさ (現状最大値)	備考
福島	号外	宮瀬	M23.7	ヨコ×タテ(mm) 384×466	図郭方位変則／久留米城址から松崎迄描入／ 川に水描線なし／等高線なし
	第壹號	久留米	23.7	462×379	首曲線のみ／標高注記あり／10m毎
	第二號	福島	23.6	464×381	上に同じ
	第三號	山内	23.6	463×382	上に同じ
	第四號	下邊春	23.6	463×385	首曲線のみ／独立標高点各地点
	第五號	上邊春	23.6	463×384	上に同じ
	第六號	水上	23.6	465×154 右下76×148	首曲線のみ／独立標高点1地点
南関	第一號	原町	23.8	466×384	首曲線のみ／標高注記なし／10m毎
	第二號	関町	23.8	467×382	首曲線のみ／標高注記関町周辺にあり／10m毎 (明治26年版熊本近傍図域)
佐賀	第一號	佐賀	—	—	欠
	第二號	若津町	23.8	465×384	等高線なし(平野)
	第三號	水田	23.8	468×381	上に同じ／東隣図福島近傍「福島」との接続 変則的重複*

注：\* 図南端の川では1点で接続 北に進むにしたがいズレが大きくなり2点に分離

られよう。各号数使用の文字形を見てもよく真似ていることを知る。途中でドイツ方式に切り換えてから、任意付番を改め、画一的なものに代えられたとなる。

九州中心部を例として、正式図に近い横長図郭の切図への方向をとる、明治25～27年版以前の図群の存在を、新たに加えてみることから、すなわち、図1に表わす分布に対し、図2、図3の、年代のわずかにさかのぼる例、明治18、20、22、23年とするものを知ることで、この地域の迅速測図について、少しでも新たな展望ができればと考える。まず、明治18年測図域からはじめる。

## 1 明治18年測図域（久留米 福島）

筑後川流域の筑紫平野、その中心域を図化した2面と考えれば、筆者の知るかぎり最も年代のさかのぼる6師団図にここが選ばれていることは自然と言えよう。交通の要点にあたる。北は福岡、博多に、東は日田に、西は佐賀に、そして南すれば熊本に、それぞれ道は通じる。そのうえ、当時熊本から小栗峠越え街道の筑紫平野を抜ける新道が、兼松、福島、久留米、田代とほぼ直線で結ぶ

形で建設されており、図に目立つ大道として表示され、これを描いた図でもある。(図2、3に黒々あるいは特別の太線として表示)

それにしても、この2図は平野中心部表現であるとともに、この平野を新たに貫通した軍用道路周辺情報図でもあった。当時としては、第6師団の輸送路近代化の象徴として、この大道のある図の作成のほうに意味があったと考える。したがって、明治18年という早い時期に、6師団として成立したとなろう(図4)。

現在、この年より前の6師団図について、熊本と関門との間では知られていない。明治10年の西南戦争対戦地に当たるだけに、他の地域に先立ち迅速測図が作成されていたとして、一向におかしくない。しかし、熊本付近でも知られているのは、一般に明治26年版の13面のもの(図1)で、それより狭い図域構成による、明治22年版図7面よりさかのぼらない。しかも、いずれも同内容図であるが、その測年をあげていない。これをあげないのには、その測年が、印刷発行年から離れていることに由来することが大きいとなろうか。第6師団司令部に所在した原図には、その測年の記入がされていたと思えるだけに、

惜しまれる。

そして、初版の図描に比べて、再版以降図で見られる傾向に、省略が施されている点があげられる。等高線自体に省略はないにせよ、脇付けの標高注記の記入が全体的に省かれたり、部分的にしか表現していない場合が多い。たとえば、明治27年版「府本近傍」図5面には、標高注記は見られない。等高線の間隔の狭さから、5m毎と推定されるところである。後述するこの図群の元となった図2にあげたB、C図群8面は、B図群が明治22年測、C図群が同20年測であり、いずれも等高線間隔は5m毎である注記が各所に表現されている(図5、6)。

## 2 明治20及22年測図域 (羽犬塚～渡瀬及三池～木葉)

筑紫平野中央域2図に続く図域のものに、図2のように、久留米から有明海寄りに熊本に向かう街道沿いを描いた8面で、久留米寄り3面(図2のⅠ～Ⅲ)が明治22年測で、熊本寄り5面(図2の1～5)が明治20年測であることは前述の通りである。しかし、なぜか図1に示されるように、明治25～27年版の段階で、周辺地域の図がほとんど一定の横長図郭の切図構成に統一されているのに、この部分に限って、縦長図を含む定位置からはずれた図郭取りの例外扱いであることに気付く。測量期の早い図域と見られるのに、なぜ、統一図郭からはずれているのだろうか。

考えられるのは、6師図の統一的図郭の基本を何に置いたか不明であるが、渡瀬から木葉に至る図化域が、他と同様の図郭とすると、有明海沿い街道図を当初作成したように描けないことにあるとみられる。

熊本から山鹿を経て小栗峠、兼松、福島を通る道、山鹿で分れ関町を経て瀬高、羽犬塚を通る道、そして山鹿の手前植木で分れ、有明海近くを経て、三池、渡瀬、瀬高を通る道と大きく3通り久留米、福岡方面に向かう道が考えられる。最初と次の山越えの道との間では、図1で分かるように、横長図郭の定位置で、それぞれの道筋が別々の図で表現される。しかし、真中の関町経由の道と有明海寄りの道との間は、互いの距離が比べて近いいため、定位置のままに図域を構成すると、それぞれに限ることができず、真中の関町を通る道の谷間のほかに、有明海斜面の一部が途中未測地をはさみ図示されることになる。逆に言えば、有明海寄り街道表現図が、東西に分割される部分が出てくることである。それぞれの経路毎という図群が、統一的、正式図並み図郭を採用するとき、一部に不都合が生じるので、本来の特色を守るため、有明海沿い図群に関し、付加的扱いの別図郭としたとなろうか。このような扱いを含むところが、迅速測図らしき

と言えよう。

ちなみに、図1の「久留米近傍 第11号 原町」図域の表現では、西側に「府本近傍 第1号 渡瀬」図域の東端を含むが、これは表現していない。同様にして、「熊本近傍 第13号 関町」図域の西側は、未測の空白のままとしている。

なお、図1で「府本近傍」図と「熊本近傍」図との接続部分に示したように、重複接続をとり、そのうえ、「府本近傍」互いの接続のまま東へ延長させると、図が指示する植木町にうまく接続しない。だんだんに図の位置を少し南に押し下げる必要がある。図1では「高瀬」「木葉」と横長図郭を少々変形させ、平行四辺形扱いとした。長州で「府本近傍」図群は、直角に方向を変える形で接続しているが、指示するままでは、うまく「熊本近傍」とは接続しない。この事実は、図2に示したB、C図群のばあいも同様と考える。明治22年版「熊本近傍」図群は、同26年版(図1)と図郭の大きさも相違し、前述のように狭い範囲の7面であったが、北側は植木町までであった。

考えてみれば、「熊本近傍」図群の作成年代不明であるが、これにともかく接続して街道のひとつを描いた図群が明治20年測とあることは、少なくともこの年代以前に「熊本近傍」の原図は測量されていたとみてよからう。

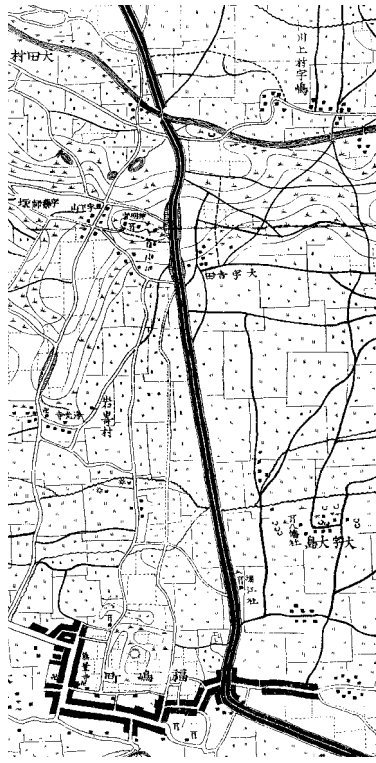
一方、「府本近傍」の前身にあたる、図2でB、C図群とした8面は、図2に表現していないが、北側でA図群の「福嶋町」西南隅で重複接続するに止らず、南東側で「熊本近傍」図とも重複する形をとる。ズレずに両端でうまく接続させるには正確さが求められる。この点は、A図群に比べ、B図群が路上測図程度の描写に簡略化されている所から見ても、途切れずにこの街道情報が一応描きこまれているという程度の図と心得て、図を利用することが肝要となろうか。

## 3 明治23年製図域 (福島 南関 佐賀各近傍 12面)

明治22年までは、久留米、福島に2面のみであった、筑紫平野中心域では、翌23年の段階に入ると、急にその周辺に図が加わる。先に成立していた図2にあって図3で省略した、羽犬塚から南西に伸びる8面を除いて12面に達する。

ただし、前述のように測年不明で、図化年月の表示で一致する。測年が製図年に近いのかの推定材料は、「南関近傍 第1号 原町」図の図化域北端が、明治22年測の「瀬高」図の図化域東端、関町方面に向かう道路表示部分、両者に「大城寺」と見える部分で接続している所

本稿掲載図はすべて2  
万分1につき縮尺表示  
省略また原寸のばあい  
も原則省略



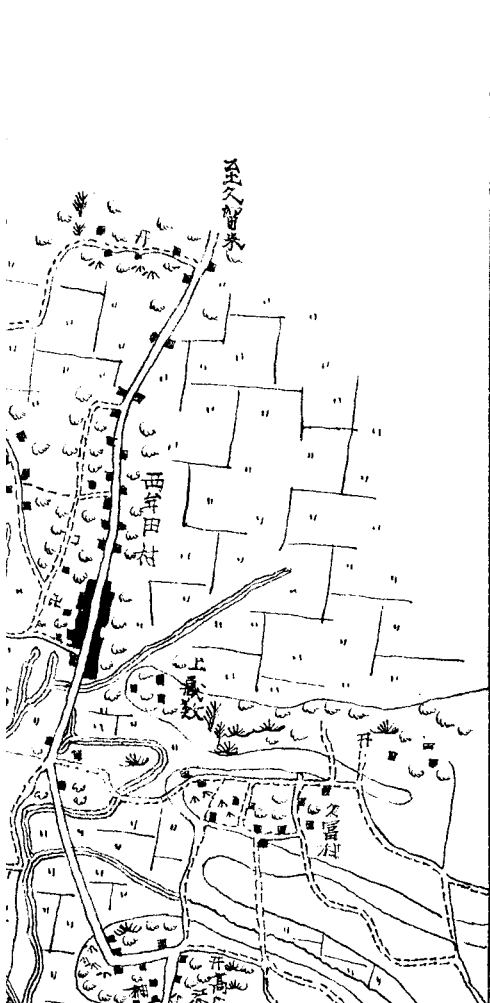
◀ 筑紫平野を南北に貫く軍用新道 (図4)

図4  
福島近傍第2号  
「福島」  
明治23.6製図  
50%

▼ 図群を越えるとうまく1線で接続しない (図7,8)

図群別測量の結果、その境界付近の集落がありえない重複と  
なった

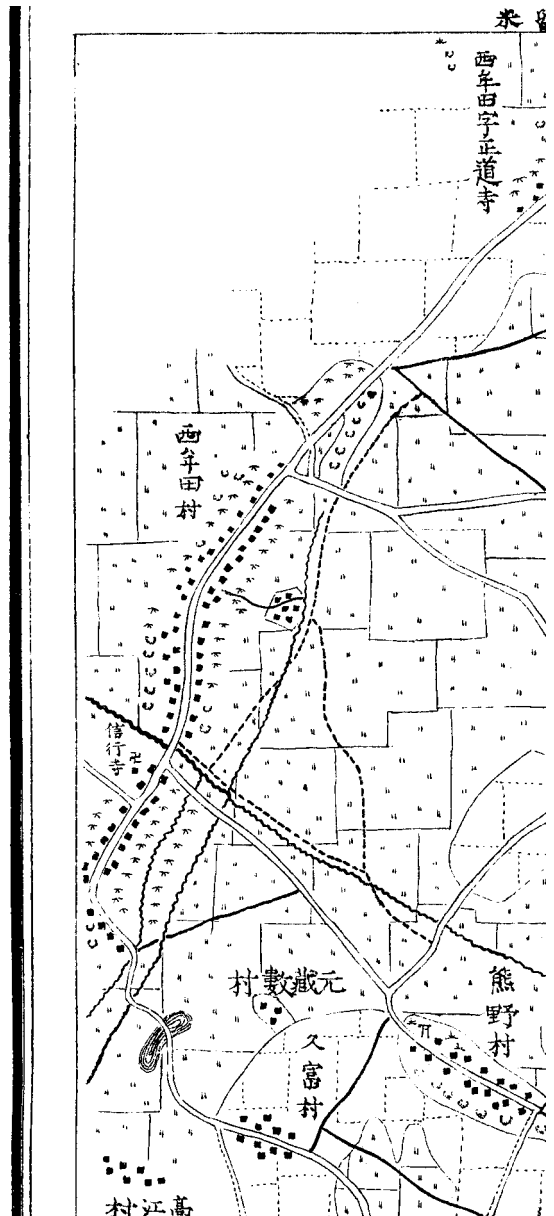
図7 佐賀近傍第3号「水田」明治23.8製図



佐賀近傍第三号

明治廿三年六月製図

図8 福島近傍第2号「福島」明治23.6製図





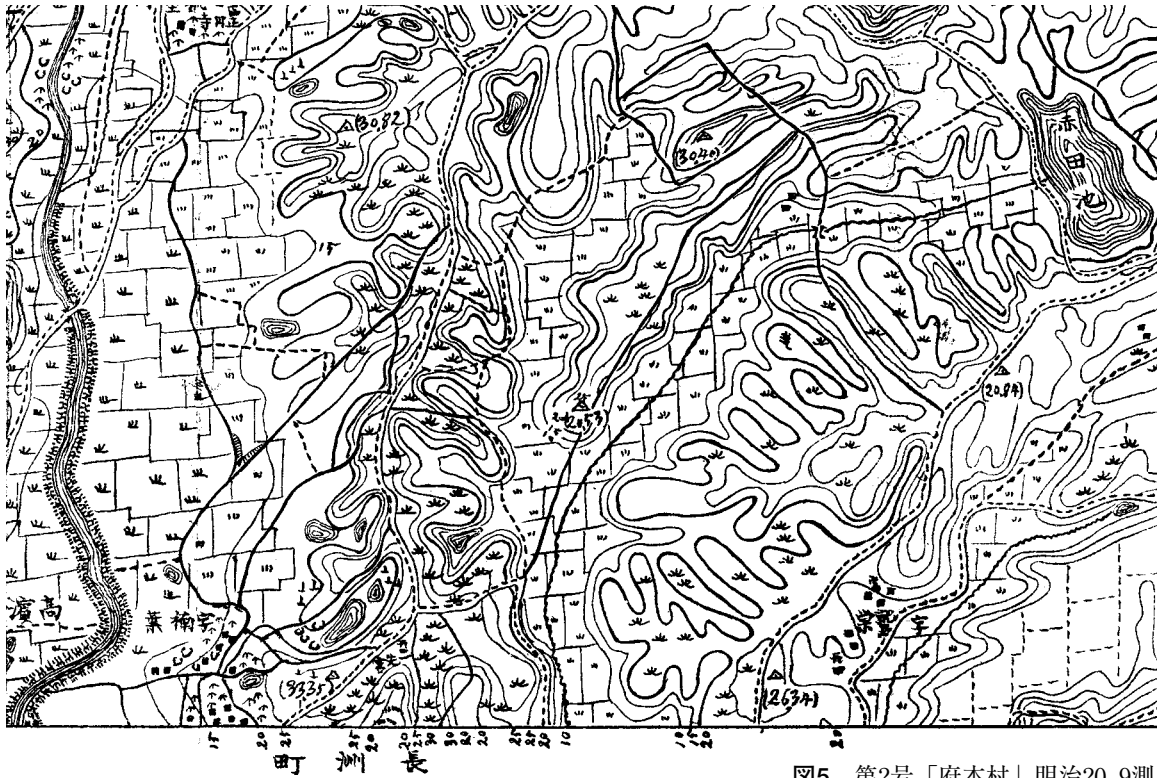


図5 第2号「府本村」明治20.9測

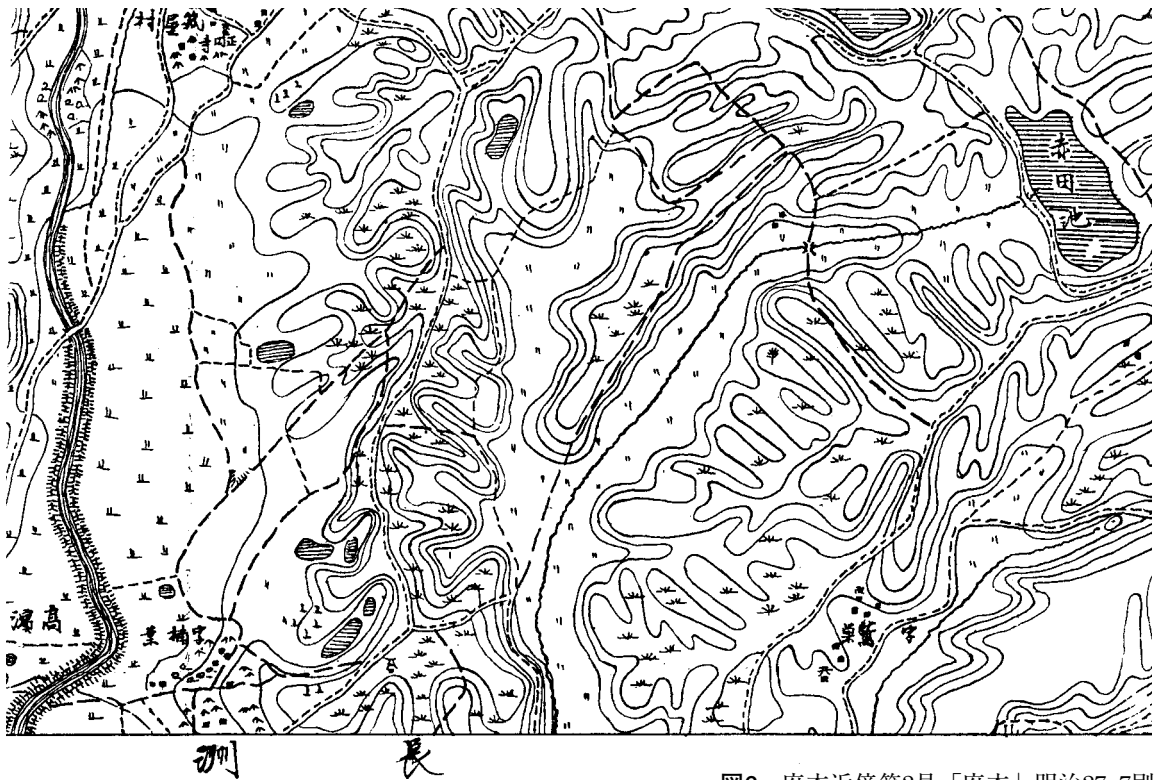


図6 府本近傍第2号「府本」明治27.7刷

初版図と再版図との図描差 (図5, 6)

測量時の細かい数値の記録である各種注記は、再版以降図で省略されやすい。図5の初版に見える標高注記あるいは独立標高点注記(小数点以下2位まで表示)は、図6にはまったく見えない

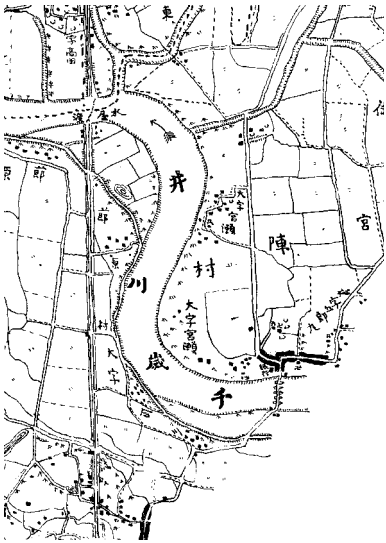


図9

▲筑後川渡河点は新道では渡し 旧道には舟橋が架る  
なお旧道が機能していたことを物語る

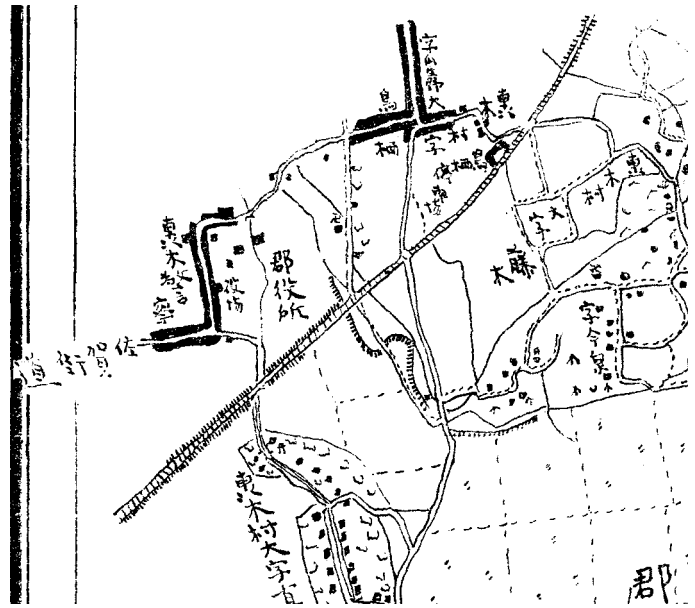


図10

初期6師団の鉄道表現 ▶  
(図10, 11) ▶

定式化以前の表現 明治25年版「久留米」近傍(図1)とは異なる

▼平野のなかで途切れる等高線(図12)  
-15m線 鳥栖村北東で途切れる

平野域で1図内が10m毎と5m毎と等高線間隔の相違するのは、  
時期を別にする図群を後にまとめたと考えられる

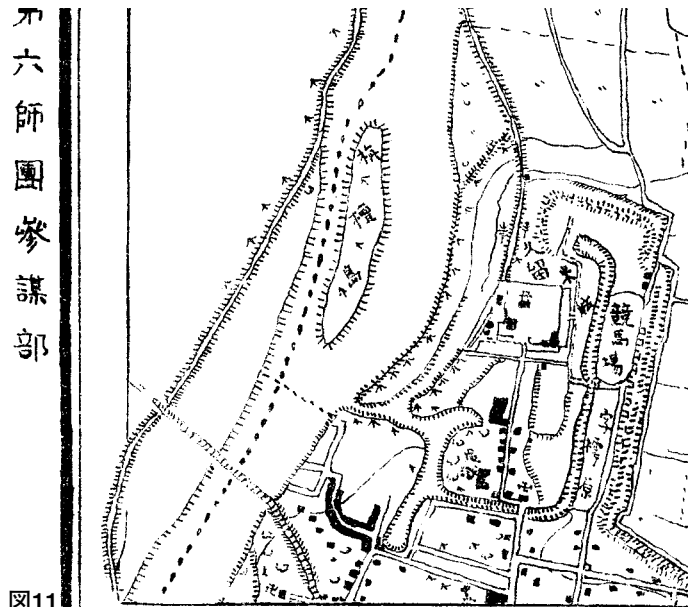
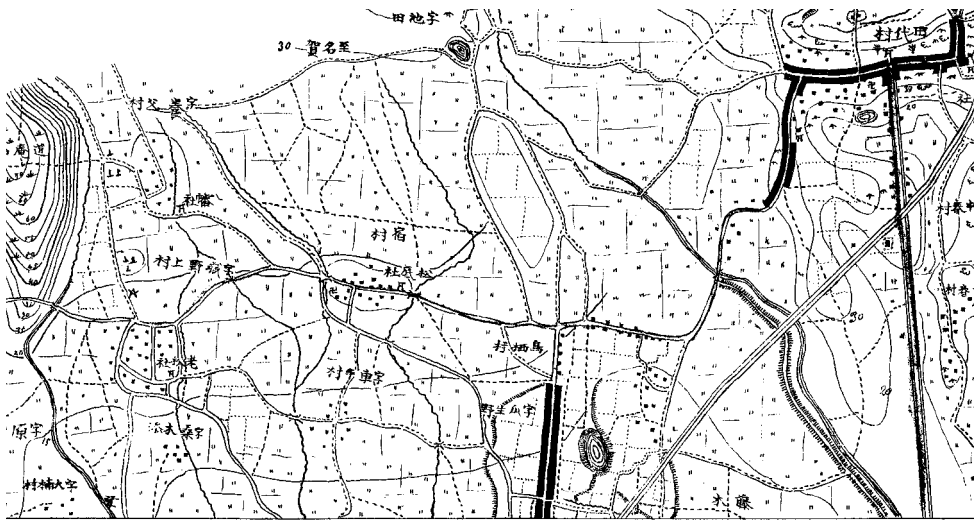


図11

図12



久留米

図9 福島近傍号外「宮瀬」  
明治23.7製図 50%

図10 上に同じ 原寸

図11 上に同じ 原寸

図12 久留米近傍第6号  
「田代」明治25.6刷  
65%

から、「原町」図は、「瀬高」図があってその道の延長を描いたとなり、明治22年以降に測量されたと考えるのが自然である。とすると、23年製図にごく近い時、22、3年のおりとなる。

一方、この時期に見られる図の接続で興味深いことは、正式図に近い大きさの横長図郭を取り、同一図群内各図は隣接図と一線で接続しているのが通常となる。しかし、別図群との接続は重複接続など、一線で上下あるいは左右が見事に接続する正確さに達していない状況が応々見られる。この時期の「佐賀近傍」図と「福島近傍」図との間に起っている。両近傍各図の原則的の大きさに相違はないが、図郭取りの位置が「福島近傍」に対し「佐賀近傍」は、僅かであるが南にズレている(図3)。そのうえ、「福島近傍 6号 水上」図を東西に流れる矢部川の流れは、「佐賀近傍 3号 水田」図の南はずれを行くのにキッチリ接続するように描かれているが、その北方、図群を別にする両図の境界線上をまたぐ集落として示される「水田」集落は、図3にA、A'と表わしたようにチグハグになり、さらに少し北へ移ると、B、B'と示したように「西牟田」集落は、隣接図の境界線近くに離れた形で2つ示される(図7、8)。両図をどう重複させても、このような3点をそれぞれ1点にすること不可能である。省別に作成された中華民国の地形図が、省を越えてはうまく接続しなかったのに通ずる現象が、一時代前の日本でも起っていたことである。近傍別に担当官が異なっていたし、精度も緩やかな一面が含まれていたとなる。明治23年製図図群間での矛盾点の調整なしに発行されたことが見えてくる。もちろん、その後の明治25年版「久留米近傍」として新しい図郭に直して、両図群がまとめられ発行されるときにはさすがに修正されて、そのような矛盾があったことは想像できない。

接続については、もう1ヶ所「久留米」図の北側に、他図とは方位のズレた「号外 宮瀬」図のことがあげられよう(図3)。

この図に限りズレた方位の図郭としたのは、明治23年製図図群作成にあたり、追加として加えられたことを暗示する。他図並み図郭によると2図域にわたるのを、図を片向けることで1面に入れたとみられる。応急版であることは、図中に描かれた「千歳川」(筑後川)には他図に認められる川中の裝飾線がなく、空白としていることで示されている。筑後川沿いの久留米から川向こう右岸域、熊本から福岡へ結ぶ新道部分の、「水屋ノ渡」から福岡方を中心に描いたものとみられる。筑後川支流の宝満川沿いの図でもある。ただし、この新道は筑後川を越すのに、橋が架かっておらず、渡し舟利用である。したがって、この部分は従来の街道を経由することが多かつ

たと考えられる。筑後川には舟橋が架けられていたと図は描く。そのうえ、「宮瀬」とする図名からも、この事実を物語る。「宮瀬」はマサに、従来の街道を久留米側から舟橋を通った向こう岸の字名である。特定図郭内に図名とする適当な大きな集落が分布しないにせよ、橋向こうの小字集落を図名に選んでいるのは暗示的と言えよう。応急版として、この図名のものは、明治25年版図で消滅している(図9)。

この特定図郭図で注目される記号に、鉄道表現がある。図の西隅に2ヶ所図示されるが、定形化される以前の図描例として貴重である。そのうえ、鳥栖<sup>とす</sup>駅で九州鉄道線が、佐賀、長崎方面へ路線分岐以前にあること、すなわち、筑後川に架橋し、久留米迄開業した明治23年3月以降の状況を示す(図10、11)。

ちなみに、南隣図「久留米」も同じ明治23年7月製図とあるが、このほうには鉄道線あるいは駅は認められない。明治18年測図のまま、鉄道補入なしに作成したことにほかならない。なお、久留米から南へ伊倉迄の開通は明治24年4月で、また鳥栖から西へ佐賀迄の開業は、同年8月のことである。明治23年6~8月製図図群では、「宮瀬」図のみに、定型化以前の鉄道記号が描入されることとなった。測年不明なこの図に、この鉄道線の筑後川架橋路線の見えるところから、この図の製図年にごく近い時に測年が考えられるとなる。九州鉄道は博多から筑後川手前の、肥前旭まで明治22年12月開業した。したがって、考えられる測年の範囲は、「宮瀬」図が後補測図とするとき、明治18年以降となり、これに鉄道補入したとすれば、同23年3月の筑後川を渡って久留米迄開通のおりにごく近い時となる。鉄道補入なしに、久留米開通時以降に測量時期が一番予想される。

図1に表示したように、明治25年版「久留米近傍」図域内では、鳥栖駅で分岐する鉄道線が、補入されている。明治27年版「府本近傍」、明治26年版「熊本近傍」両図群域内では、鉄道補入は加えられていない。「瀬高」図の東南隅までで、その南に続く「渡瀬」図から「熊本」図に至るまで鉄道路線の記入は見られない。

#### 4 図群による図描差

今回取りあげた、九州の中心部、久留米付近の第6師団作成迅速測図について、その発行年代別に見通すと、明治18年測域から同27年発行図に至るまで、順次、主要道路沿いの地域情報が、拡大し、その密度を高める過程にほかならない。

範囲が広められた結果は、それらの中に年代による図描差を残している。必ずしも、後からの訂正が加えられ

て統一されているとは限らない。

たとえば、等高線間隔の設定が、同一図群内にもかかわらず、2通りに別れる場合がみられる。これは、同一目的、時期に作成された図群は、本来、同一図描にもとづくとするれば、もともとは時期を別にする別図群として作成されていたことを物語っているといえよう。5m毎と10m毎とが、同一図内で出現している。明治25年版「久留米近傍」図群中の北端を占める「小郡」「田代」の2面中、また、明治26年版「熊本近傍」図群中のやはり北端部の「三嶽」「肥猪町」「江田」の3面中に、場所を分けて認められる。地形の険しさに段差が大きければ、等高線の表現上、間隔が少なくなり、かえって分かりにくくなる場合、表現間隔を変更することはあるが、筑紫平野周辺では、そのような所に6師団図は達していない。

なお、等高線をはじめ道路、集落、地名など図の基本的表現内容が同一であっても、細かい表現、たとえば等高線脇に付記する数字、すなわち標高注記、あるいは場所場所の高さの記録、独立標高点の記入のあるなしは、前に触れたように、版により同じではない。傾向として、初版時に存在したものが、再版以降省略される部分が多くなる。等高線の省略は見られないが、脇付け数値の省略あるいは分布密度の低い図は、再版以降図とみなして間違いない。

明治26年版「熊本近傍」図の場合北部に限られるが、2つの等高線間隔が表現されているうちの5m毎部分に（前述図）、小数点以下2位までの標高値が表現される部分がある。

そして、前述「田代」図内の、北の「田代村」と西の「鳥栖村」との間の小川を境にして、北では首曲線（細線）のみによる10m毎の等高線方式と、西では計曲線（中太線）入りで5m毎の方式とに分かれ、その間では15mの等高線は途中で切れている（図12）。

## おわりに

西南戦争の主戦場となった、熊本を中心に、第6師団による迅速測図は、正式図作成がこの方面に到達するまで、広い範囲で存在した。首都東京を中心とする関東平野域に第1師団による図が分布するのを頂点とし、一方には戊辰戦争域の東北地方に、第2師団図が仙台地域を中心に関東に接続する広がりを見せた。これら広域分布師団作成図域のひとつが、6師団図であった。

明治30年代後半に入り、2万分1正式地形図が西へ進み九州入りに及んだ頃、九州所在第6師団作成迅速測図は、九州の入口にあたる関門地域から、主要交通路に沿い、福岡、熊本と結ぶに止らず、佐賀、長崎、佐世保、島原、

八代、阿蘇谷に達していた。筑紫平野を軸とする広がりには連続する図ができていた。九州東側では、周防灘に面する部分を国東半島入口の高田まで作られていた。これから南方は、西側の八代から先は飛び飛びに平野部に見られた。人吉盆地、そして水俣から大口、加治木経由で鹿児島、伊集院、加世田まで一連の図がある。阿久根、川内、都城せんだいに小分布が知られる。これに反し、東側では大分、延岡、宮崎ともに、図名を聞かない。したが、完全とは言えないが、ほぼ必要重要地点に達すること可能な、道路沿いの図は、6師団図の段階で成立していたと見てよい。

九州の迅速測図が、明治10年の西南戦争後、何時から作成されたか、一番最初に予想される駐在軍司令部の置かれた熊本近傍の場合、前述のように明治22年版でその測年を示さない。筑紫平野中心部で、明治18年測域からはじまり、同22年測域にひろがる。そして、同23年製図域で、一応平野の周辺部谷間地域を含むまでに図化作業が進む。日清戦争直前明治27年発行時までには、例外を含みながら、正式図郭に近い横長図に統一し、一応、熊本と中央との間を結ぶ方向の主要道路沿い図が準備された。ただし、その図描内容は、順次図域を拡大してきた、その折々採用のもの集合体、調整のうえに成立していることを知る。同じ縮尺図にもかかわらず、たとえば等高線間隔は、5m毎と10m毎との双方を1図の中に含む。平野内での表現としてである。迅速測図の図式にしたがい作成されているが、作成初期に見られる、折々の試みが少数図群の集積結果として、統一に至れぬままの表現を含み続ける。このことが、かえって年度を別にする図群形成、すなわち場所と年度とを合せ各地域で見られた地図作りの努力を知る手掛りを与えてくれる。

日清戦争後の周辺への図化域拡大時と、それ以前の明治27年に至る迄の、地方基本図域作成段階とでは、予算のこともあるに違いなかろうが、国家中央機関作成の正式図の全国波及の緩やかさに同じく、地域軍作成図域の単位は小刻み状況であったことが、第6師団の明治18年から同27年に至る、測量あるいは製図・製版とする一連の迅速測図群から判明する。（2004. 09. 30 定稿）

### 文献

- 1) 清水靖夫 (1988) 正式測図以前の諸測図概観 - 西日本編 - 月刊古地図研究二百号記念論集. 日本地図資料協会. うち熊本鎮台, 第6師団迅速測図 p. 418~425. 同分布図 p. 417, 419, 422.
  - 2) 井口悦男 (1993) 六師 (熊本) 作成迅速測図一報. 月刊古地図研究 286. 文献1) に図を加えて簡単に解説.
  - 3) 井口悦男 (1988) 佐世保付近正式測図以前 - 北松浦半島域2万分1四図群 -. 帝京大学文学部紀要 教育学 No. 23, p. 27~49. 名称のみの図群の分布状況に及ぶ.
  - 4) 井口悦男 (2001) 明治期迅速測図の基礎的研究. 243 p. 上記井口発表を所収. 自家版
  - 5) 井口悦男 (2002) 福岡~小倉間の2万分1迅速測図. 帝京大学文学部紀要 教育学 No. 27 p. 133~154. 福岡~小倉間に図のあることを述べた.
  - 6) 井口悦男 (2004) 肥前大村周辺正式以前測図. 帝京大学文学部紀要 教育学 No. 29 p. 131~152. 大村聯隊移駐に関連し長崎県域へ大村を中心とし佐世保, 長崎両要塞域そして島原方面に図が及ぶ.
- 地図で見る百年前の日本 (1998) 「地図で見る百年前の日本」編集委員会. 小学館. 303 p. うち久留米, 熊本 p. 222, 228.
- 地図目録〔四国・九州地方の部〕国立国会図書館所蔵 昭和47年3月末日現在. (1973) 国立国会図書館. 160 p. うち6師迅速測図 p. 124~126.
- 角川日本地名大辞典 40 福岡県 (1988) 竹内理三編. 角川書店. 2044 p.
- 同上 41 佐賀県 (1982) 同上. 同上. 1118 p.
- 同上 48 熊本県 (1987) 同上. 同上. 1689 p.
- 日本図誌大系 九州 I 福岡県・佐賀県・長崎県・大分県 (1976) 山口恵一郎外編集. 朝倉書店. 430 p. うち筑紫平野域図 p. 120~133, 138~167, 173~175.
- 日本図誌大系 九州 II 熊本県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県 (1977) 山口恵一郎外編集. 朝倉書店. 426 p. うち筑後, 肥後間図 p. 2~15, 24~49.
- 2万分1地形図 地形図図歴表-3- (1971) 日本国際地図学会地図史部会. 地図 9 No. 2 p. 42, 43. 筑紫平野域, 熊本周辺各図名.
- 正式二万分一地形図集成 九州 (2001) 地図資料編纂会. 柏書房.

### キーワード

迅速測図 路上測図 師団図 6師図 図の接続 等高線の間隔 標高注記 標高点注記 鉄道表記

